

---

# 中国人日本語学習者の音象徴語の理解

---

飯田香織（名古屋大学大学院）

玉岡賀津雄（名古屋大学）

初相娟（名古屋大学大学院）

**要 旨** 音象徴語は、外界や人の心的な様子や状態を模倣した語である。よって、日本語学習者であっても日本語母語話者と同じように音象徴語を難なく学習することができるとする考えがある。しかし反対に、音象徴語は、日本語特有の語彙であり、上級の日本語学習者にとっても容易ではないという報告もある。そこで本稿では、中国語を母語とする日本語学習者に対して、音象徴語が適切に修飾する動詞について四者択一問題を作成し、理解度を測定した。さらに、読解能力で分けた上・中・下位群別に音象徴語の理解を分析した結果、読解力と共に音象徴語の理解も向上していた。3群の音象徴語の平均得点を使ってクラスタ分析を行った結果、得点が高かったクラスタは中国語にも類似の音象徴語があった。音象徴語の理解には、両言語の類似性の影響もみられる。しかし、読解との関係が強いので、音象徴語は自然に習得されるというより、主に学習によって習得されるべき語彙であるといえよう。

**キーワード** 音象徴語, 読解能力, 中国人日本語学習者, 意味理解課題, クラスタ分析

## 1. 問題

擬音語・擬態語の総称としては、オノマトペという語が用いられることが多い。しかし、オノマトペという語の由来である *onomatopoeia* が主に動物の鳴き声を模倣した語を指すのに対し、日本語のオノマトペは必ずしも音を伴わない様態や心情を表す語も含まれている。また、はっきり擬音語か擬態語かを区分できない意味を複数持つ多義音象徴語も多く存在している（玉岡・木山・宮岡 2011）。このことから、本稿では言語学的な擬音語・擬態語の総称として、「音象徴語」を用いることにする（羽佐田 2005; 玉村 1989）。日本語学習者の日本語の音象徴語理解に関する研究において、音象徴語は一般語彙とは異なり「イメージ喚起度が高い語」（呂 2004）や「視覚や聴覚などの感覚に訴える語群」（三上 2004）であるため、音象徴語の表す意味を学習することなく日本語学習者がその意味を感覚的に理解できる側面がある（王 2011）と指摘されている。王（2011）の実験調査では、日本語学習者（インドネシア人と中国人）と日本語母語話者が音象徴語の有声音と無声音の「重さ」に対する評価が類似していることから、日本語学習者も日本語母語話者と同じように音象徴語を自然に習得できる側面があるとしている。つまり、音象徴語の普遍性を強調した主張である。

こうした研究（三上 2004; 王 2011; 呂 2004）とは異なる結果も報告されている。針生・趙（2007）は、有声音と無声音対比の音象徴語と大小を表す対象に対応付ける課題を中国の大学で日本語を専攻している中国人学生2年生（40名）と4年生（32名）に課した。しかし、両グループにパフォーマンスの差は見られなかった。大小をどう判断したか

という判断理由に「日本語の音象徴語では有声音が大きいことを表す」というような「ルールへの言及」をした学生は、2年生と4年生にわずかに1名ずつしかいなかった。つまり、日本語の学習年数が長くなっても、音象徴語の知識には違いがみられなかった(針生・趙 2007)。つまり、音象徴語の理解が有聲・無聲に関係したルールベースでもなく、また日本語能力とも関係しないという結果であった。音象徴語の普遍性を主張する研究(三上 2004; 王 2011; 呂 2004)では、音象徴語があらゆる意味的側面は有声音と無声音対比(有声音の方が無声音の音象徴語よりも大きい音を表す等)にのみに焦点を当てて検討されており、音象徴語が語彙であることが意識されていない。

一方、「とぼとぼ歩く」「ぼたぼた落ちる」「がんがん言う」「ごくごく飲む」など2音節の反復した形態は、音象徴語の最も典型的な形態であるとされており、主に副詞として機能することが指摘されている(羽佐田 2005; 田守・スコウラップ 2001; 田守 2003; Toratani 2007)。そして、二音節反復型以外の音象徴語よりも2音節の反復した音象徴語の方が、慣習的に語彙として認められているものが多い(Kakehi 1983)。さらに、この副詞として動詞を修飾する2音節反復型の音象徴語と動詞の共起関係には音象徴語の多義性が影響することが明らかにされている(玉岡・木山・宮岡 2011)。そこで、本稿では日本語の読解能力を総合的な日本語能力と位置づけ、中国で日本語を専攻している中国人大学生に対し、読解能力テストと音象徴語の意味理解課題についての質問紙調査を行った。

## 2. 調査方法

### 2.1 音象徴語の選択

本研究では、玉岡・宮岡・金・林(2011)で使用された二音節反復型で副詞として機能する音象徴語30語を刺激語として選んだ。それら30語の音象徴語の選出条件は、①多義語と単義語の音象徴語がそれぞれ半分ずつ含まれていること、②初・中級学習者向けの市販の日本語教材や学習参考書に記載されていること、③ひらがなで表記される畳語で、音象徴語であることが誰から見ても自明であること、④形容動詞としては使えないこと、⑤「する」以外の動詞と共に使用されるのが一般的であるもの、⑥様態の副詞として使えること、とした。多義語か単義語であるかの判定は、広辞苑第六版(新村 2008)と日本語オノマトペ辞典(小野 2007)を用い、意味が2つ以上ある音象徴語を多義語、そうでないものを単義語とした。質問形式は、テキストを与えずに、30語の音象徴語それぞれに4つの選択肢があり、その中から各音象徴語と一緒に使える適切な1つの動詞を選ぶというものである。例えば、「ぷんぷん」という音象徴語であれば、「計画する」「負ける」「怒る」「太る」という4つから共起する動詞として正しいもの1つを選ぶ形式である。この場合は、「ぷんぷん」に対して「怒る」が正しい選択である。選択肢の動詞は、日本語能力試験(旧試験)で4級から2級までのものとし、正解以外の選択肢は、30問すべて異なる動詞である。選択肢には「洗濯する」などのサ変動詞と「選ぶ」「遊ぶ」「買う」などの普通の動詞の両方がランダムに含まれており、4つの動詞の日本語能力試験の級は統制されている。

### 2.2 調査協力者

中国華北地域の大学で1年から2年にわたり日本語を学習している中国語を母語とする日本語学習者117名(女性94名、男性23名)に対して、日本語音象徴語の意味理解課題(以後、意味理解課題と呼ぶ)と長文の日本語読解テスト(以後、読解テストと呼ぶ)を

行なった。これら 117 名の平均年齢は 20 歳 5 ヶ月である。最も年齢が高かった人は 24 歳 3 ヶ月、最も年齢が低かった人は 18 歳 4 ヶ月だった。読解テストと音象徴語の意味理解課題のどちらも時間制限は設定せず、全員が読解テストを終えた時点で意味理解課題を行なった。本調査に使用した読解テストの問題は、大部分を日本語能力試験から借用し、日本語能力試験の設問に準拠した問題作成を行なった。この読解テストには 3 つのテキストがあり、1 つのテキストについて 4 つの質問があるので、合計 12 問の 12 点満点となる。音象徴語の意味理解課題の質問紙には、日本語音象徴語 30 語の各語に対して正しい意味を選ぶという四者択一問題を提示した。

### 2.3 長文の読解能力に基づいた群分け

読解テストの結果は、最高が 11 点、最低が 1 点、平均値が 6.36 点、標準偏差が 2.51 点であった。音象徴語と読解得点には、非常に高い正の相関が見られた ( $r = .719, p < .001$ )。読解テストの得点分布にしたがって、上位・中位・下位の群分けを行なった。上位群は平均の 6.36 点から標準偏差+1 以上 ( $6.36 + 2.51 = 8.87$ ) の 8 点以上とし、31 名を選んだ。中位群は平均の 6.36 点に極めて近い 6 点と 7 点から 32 名を選んだ。下位群は、平均の 6.36 点から標準偏差-1 ( $6.36 - 2.51 = 3.85$ ) 以下の 3 点以下とし、24 名を選んだ。これらの 3 群を分析対象とした。これらの上位・中位・下位群の 30 の音象徴語問題の正答者数、誤答者数、正答率は、表 1 に示した通りである。

表 1 中国人日本語学習者による日本語の音象徴語の正答者数、誤答者数および正答率

日本語音象徴語	下位群 (N=24)			中位群 (N=32)			上位群 (N=31)		
	正答者数	誤答者数	正答率	正答者数	誤答者数	正答率	正答者数	誤答者数	正答率
1 げらげら	17	7	70.83%	28	4	87.50%	31	0	100.00%
2 じゃあじゃあ	2	22	8.33%	19	13	59.38%	19	12	61.29%
3 ぼうぼう	19	5	79.17%	27	5	84.38%	28	3	90.32%
4 ごくごく	9	15	38.00%	19	13	59.00%	17	14	55.00%
5 ぼたぼた	18	6	75.00%	29	3	90.63%	29	2	93.55%
6 じろじろ	3	21	12.50%	9	23	28.13%	11	20	35.48%
7 ずきずき	16	8	66.67%	24	8	75.00%	27	4	87.10%
8 すやすや	2	22	8.33%	8	24	25.00%	14	17	45.16%
9 そよそよ	1	23	4.17%	15	17	46.88%	19	12	61.29%
10 ちよきちよき	12	12	50.00%	25	7	78.13%	28	3	90.32%
11 めそめそ	11	13	45.83%	25	7	78.13%	26	5	83.87%
12 ゆらゆら	11	13	45.83%	25	7	78.13%	28	3	90.32%
13 しとしと	7	17	29.17%	17	15	53.00%	23	8	74.00%
14 びよんびよん	17	7	70.83%	25	7	78.13%	29	2	93.55%
15 きらきら	21	3	87.50%	31	1	96.88%	30	1	96.77%
16 すらすら	4	20	16.67%	15	17	46.88%	20	11	64.52%
17 がんがん	6	18	25.00%	15	17	46.88%	23	8	74.19%
18 ぶんぶん	7	17	29.17%	20	12	62.50%	26	5	83.87%
19 どんどん	7	17	29.17%	16	16	50.00%	24	7	77.42%
20 だらだら	11	13	45.00%	23	9	72.00%	21	11	68.00%
21 ぐうぐう	3	21	12.50%	10	22	31.25%	14	17	45.16%
22 ことこと	13	11	54.17%	25	7	78.13%	25	6	80.65%
23 ころころ	15	9	62.50%	23	9	71.88%	25	6	80.65%
24 きいきい	6	18	25.00%	25	7	78.13%	27	4	87.10%
25 ばたばた	11	13	45.83%	21	11	65.63%	26	5	83.87%
26 かんかん	5	19	20.83%	10	22	31.25%	15	16	48.39%
27 しくしく	11	13	45.83%	23	9	71.88%	27	4	87.10%
28 ちよろちよろ	3	21	12.50%	10	22	31.25%	17	14	54.84%
29 ぱりぱり	9	15	37.50%	14	18	43.75%	24	7	77.42%
30 ぐらぐら	2	22	8.33%	17	15	53.13%	23	8	74.19%

## 3. 分析結果

### 3.1 読解力と音象徴語の理解の関係

本研究の統計分析には PASW Statistics Base 18.0 (Japanese version) を用いた。まず、単義語と多義語の音象徴語の項目の正答率の違いは見られなかった [ $F(1, 28) = 2.308, p = .140, ns.$ ]。つまり、日本語母語話者の結果 (玉岡・木山・宮岡 2011) と異なり、中国

人日本語学習者の音象徴語の理解において、多義性の影響は見られなかった。次に、読解能力の違いが日本語の音象徴語理解に及ぼす効果を検討するために、音象徴語の正解得点について、日本語の読解能力で分けた3群（上位群，中位群，下位群）の一元配置の分散分析を行った。その結果、有意な主効果がみられた [ $F(2, 84)=358.146, p<.001$ ]。シェフェ法による多重比較の結果、3群おのおのにおいて有意な違いが見られた。まず、上位群 ( $M=22.45, SD=1.61$ ) が、中位群 ( $M=17.91, SD=1.25$ ) および下位群 ( $M=11.63, SD=1.61$ ) より音象徴語の理解が有意に高かった。また、中位群と下位群の間にも有意な違いが見られた。したがって、読解能力が音象徴語の理解に強く影響していることが示された。

次に、音象徴語の個々の難易度を考察するために、上位・中位・下位群の平均正答率（具体的な数値は表1を参照）を使って、グループ間の距離はグループ内平均連結法、音象徴語間の距離は平方ユークリッド距離を用いて階層的クラスタ分析を行った。クラスタ分析は、類似した群を見出すために利用できる探索的な手法である（繁榎・柳井・森 1999）。図1に示したように、スケールで6ポイントの位置で4つのクラスタにわかれた。階層的クラスタ分析によって得られた4つのクラスタが、真に意味のあるまとまりをもっているかどうかを検証する目的で、さらに判別分析を適用した。その結果、93.3%の判別率（クラスタのまとまりの良さ）で4つのクラスタに分けられたので、それぞれのクラスタが正しく分類されていることが示された。

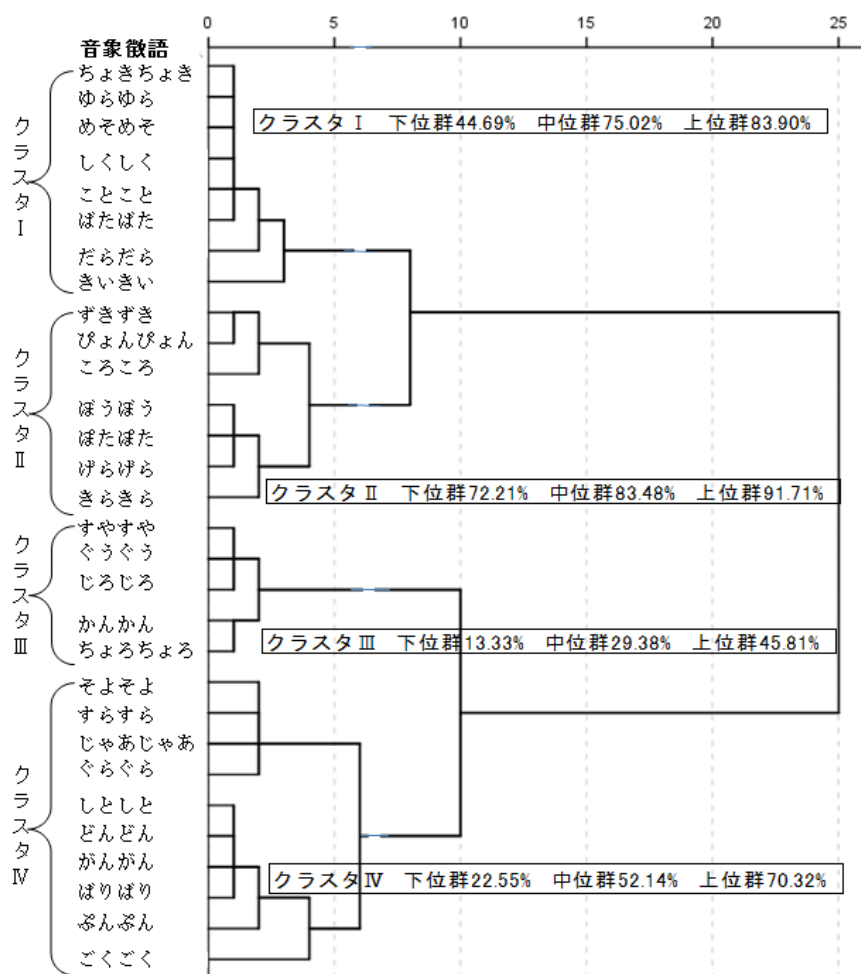


図1 音象徴語 30 語の階層的クラスタ分析による平均連結法によるデンドログラム

具体的には、第1クラスには8語、第2クラスには7語、第3クラスには5語、第4クラスには10語の音象徴語が含まれていた。各クラスの音象徴語の平均正答率は表3に示した通りである。また、得られた4つのクラスを独立変数、3群の正答率を従属変数とした一元配置の分散分析を行なった。その結果、3群全てにおいて有意であった[下位群が  $F(3, 26)=52.570, p<.001$ , 中位群が  $F(3, 26)=91.003, p<.001$ , 上位群が  $F(3, 26)=39.058, p<.001$ ]。シェフェの多重比較の結果は、表2に示した。この結果から、音象徴語によって、正答率に大きな違いがあることが分かった。全体的にみて、クラスIIの正答率がすべての聴解能力で分けた群で高く、次がクラスIであり、クラスIIIが逆に低かった。

表2 クラス別音象徴語の平均正答率の比較

読解能力	クラスI (N=8語)	クラスII (N=7語)	クラスIII (N=5語)	クラスIV (N=10語)	シェフェの多重比較
下位群	44.69%	73.21%	13.33%	22.55%	III=IV<I<II
中位群	75.02%	83.48%	29.38%	52.14%	III<IV<I=II
上位群	83.90%	91.71%	45.81%	70.32%	III<IV<I=II

注：Nは音象徴語の項目数を示す。

さらに、読解能力で分けた3群を独立変数、4つのクラスを従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、4つのクラス全てにおいて有意であった(クラスIが  $F(2, 84)=34.645, p<.001$ , クラスIIが  $F(2, 84)=13.068, p<.001$ , クラスIIIが  $F(2, 84)=17.705, p<.001$ , クラスIVが  $F(2, 84)=89.658, p<.001$ )。また、シェフェの多重比較を行った結果は、表3に示した。この結果から、読解能力の高い学習者はどのクラスにおいても平均得点(1つの音象徴語が1点)が高いことが示された。ただし、最も正答率あるいは得点の高かったクラスIIについては、下位群と中位群の間に違いはなかった。クラスIIの音象徴語は、下位・中位群にとっても比較的理解しやすかったことが分かる。

表3 読解能力別の各クラスの平均正答得点の比較と多重比較の結果

クラス	下位群 (N=24)	中位群 (N=32)	上位群 (N=31)	シェフェの多重比較
クラスI(N=8語)	3.33	5.06	5.84	下位群<中位群<上位群
クラスII(N=7語)	5.13	5.66	6.42	下位群=中位群<上位群
クラスIII(N=5語)	0.67	1.44	2.29	下位群<中位群<上位群
クラスIV(N=10語)	1.33	3.44	5.00	下位群<中位群<上位群

### 3.2 クラス分析の結果

それぞれ日本語能力別に分けた3群(上位群・中位群・下位群)全てにおいて意味を理解しやすい音象徴語とそうでない音象徴語があるという特徴が示されたことから、クラス分析によって分けられた4つのクラスの特徴について中国語文法用例辞典(呂・牛島・菱沼 2003)を参照しながら考察する。

すべての群で正答率が高かったクラスIIは、3群全ての平均正答率が73%以上と高か

ったことから、日本語能力の違いに関わらず意味が理解しやすい音象徴語であったことがわかる。クラスタⅡに含まれていた音象徴語は「げらげら笑う」、「ぼたぼた落ちる」、「ぴょんぴょん飛ぶ」、「ずきずき痛む」、「ころころ転がる」、「ぼうぼう燃える」で、すべて単義の音象徴語であった。本研究で用いた 30 語すべての音象徴語の結果からは、単義語と多義語の音象徴語による違いは見られなかったが、クラスタⅡについてのみ議論すれば、単義の音象徴語は共起する動詞の選択の幅が多義の音象徴語に比べて限定されるので、理解しやすかったのであろう。この点では、先行研究の指摘と一致する（玉岡・宮岡・金・林 2011）。

次に正答率の高かったクラスタⅠの音象徴語は、中国語でも類似の音象徴語が存在する。例えば、単義の「めそめそ泣く」は中国語では“哭哭啼啼”であり、多義の「しくしく泣く」は“呜呜咽咽”，単義の「ゆらゆら揺れる」は“揺来揺去”，多義の「だらだら流れる」は“嘀嗒嘀嗒”，多義の「きいきい鳴る」は“吱吱”が相当する。田守（2003）によると、これらの音象徴語は、中国語から借入した語彙であり、多義の音象徴語であっても中国人日本語学習者には、意味を理解しやすかったのであろう。この理由で、上位群と中位群の学習者にとって、クラスタⅠの音象徴語は、クラスタⅡと同程度に意味を理解しやすかったのであろうと思われる。

クラスタⅢ、Ⅳについてはチャンスレベル以上の正答率であった「どんどん」「がんがん」「かんかん」を主な考察対象として取り上げることとする。

まず、クラスタⅣは「どんどん」以外は中国語にはない（または用法が異なる）様子や音を表す音象徴語で構成されていた。「じゃあじゃあ流す」と似た中国語の音象徴語には「嘩啦啦」があるが、この語は自動詞と共起することが多く、川の水などが流れる様子を表す音象徴語であることから「じゃあじゃあ流す」という意味には結びつかなかったことが考えられる。また、「どんどん叩く」は中国語に「咚咚」という類似した音象徴語があるにも関わらず、クラスタⅠ、Ⅱよりも正答率の低いクラスタⅣに含まれていた。これは「音象徴語には、日常的な経験を基盤とする百科全書的な知識のネットワーク、イメージ・スキーマによって支えられた多義語の比喩的な拡張プロセスがある」（呂 2004）ことや、「音象徴語は様態、スピード、形状、雰囲気、参与者、受けた印象などのイメージの総体である」（山梨 2000; 呂 2004）という指摘を踏まえると、学習者が日本語の音象徴語について誤ったスキーマを形成していることも考えられる。調査対象者全体で「どんどん叩く」は 51.72%の割合で選択されていたが、誤った選択肢である「どんどん感心する」もチャンスレベル以上(31.03%)の割合で選ばれていた。また、「がんがん曇る」(37.93%)もチャンスレベル以上の割合を示していた。つまり、学習者は「どんどん」と「がんがん」という音象徴語に対し、少なくとも2つ以上の多様なスキーマを持っていることが推測される。その1つは「音や声（話し方）」に関するスキーマ（「どんどん叩く」「がんがん言う」）であり、もう1つは「物事や心的状況が進行または深まっていく様子」（「どんどん感心する」「がんがん曇る」）を表すスキーマではないだろうか。このように学習者の中で日本語と中国語の音象徴語のスキーマの間にズレが生じたことから、クラスタⅣの音象徴語はクラスタⅠやクラスタⅡよりも低い正答率であったことが考えられる。

最後に、クラスタⅢはどの読解能力の群においても最も平均正答率が低かった。その理由としては、「すやすや寝る」「ぐうぐう寝る」「じろじろ見る」「ちょろちょろ流れる」などの音象徴語が表す様子は、誰があるいは何が、どんな状態の時に使われ、またどこに動

作や様子の着眼点が置かれているのかということが捉えにくいことが考えられる。また、クラスタⅢの音象徴語は「かんかん鳴る」以外は類似の意味を持つ音象徴語が中国語になかった。では、「かんかん鳴る」という音象徴語は中国語にも類似の音象徴語の「啞啞」が存在するにも関わらず正答率の1番低いクラスタ(27.59%)に含まれていた。それは、クラスタⅣのケースと同様に中国人日本語学習者の中では CVNVCVN 形式の音象徴語は「物事や心的状況が進行または深まっていく様子」を表すというスキーマが形成されているからではないかと考えられる。そのため、そのスキーマに当てはめても不自然ではない2つの選択肢の「かんかん勝つ」(27.59%)や「かんかん考える」(28.74%)が、「かんかん鳴る」と同程度の割合で選ばれたのであろう。これは、学習者の経験的・直感的な習得に頼ると、音象徴語の意味やその用法に間違いが出てくる可能性を示唆するものである。

#### 4. 結論

従来の音象徴語理解に関する研究では、音象徴語の理解には音に対する感じ方が重要であり、より普遍的なものであると捉えられてきた (Iwasaki, Vinson & Vigliocco 2007; 王 2011)。しかし、本研究では、読解能力が高い程、音象徴語の意味の理解も高くなることが確かめられた。また、類似の中国語の音象徴語があつたとしても、日本語学習者が各音象徴語の意味や用法を正しく理解するのは困難な場合があることを明らかにした。さらに、日本語学習者が経験的・直感的に音象徴語を学ぶことによって、音象徴語の意味を誤って理解してしまうことも示唆された。したがって、先行研究で述べられてきたような音象徴語が自然に習得される可能性は低く、むしろ本研究では、音象徴語は特定言語の特定語彙として意識的に学んでいく必要があることを示した。

#### 参考文献：

- 羽佐田理恵 (2005) 「福祉の視点から見た感情を表す音象徴語：その分析過程から導かれた問題点への取り組み」 武内道子 (編) 『副詞的表現をめぐって』 pp. 175-211, ひつじ書房。
- 針生悦子・趙麗華 (2007) 「日本語における有声音/無声音対比の擬音語と大小の対応づけ：日中大学生による判断の比較」 『日本認知科学会大会発表論文集』 23, pp. 66-67.
- 三上京子 (2004) 「多義オノマトペの意味・用法の記述と指導の試み」 『小出記念日本語教育研究会論文集』 12, pp. 63-75.
- 新村出 (2008) 『広辞苑 第六版』 岩波書店。
- 王瑩 (2011) 「異なる日本語学習者による日本語のオノマトペに対する感覚評価日本語教育研究」 『日本語教育研究』 57, pp. 65-82.
- 小野正弘 (2007) 『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 小学館。
- 呂佳蓉 (2004) 「比喩としてのオノマトペ-「ころころ」と「圓滾滾」(ワークショップ 比喩が関わる言語現象の諸相-対照研究的な視点から)」 『日本認知言語学会論文集』 4, pp. 480-483.
- 呂叔湘主編 (牛島徳次・菱沼透 監訳) (2003) 『中国語文法用例辞典—《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』 東方書店
- 繁榊算男・柳井晴夫・森敏昭 (編著) (1999) 『Q&A で知る統計データ解析: DOs and DON'Ts』 pp. 11-20, サイエンス社。
- 玉岡賀津雄・木山幸子・宮岡弥生 (2011) 「新聞と小説のコーパスにおけるオノマトペと動詞の共起パターン」 『言語研究』 139, pp.57-84.



玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞・林炫情（2011）「韓国語を母語とする日本語学習者の語彙知識がオノマトペの習得に与える影響」『言語教育評価研究』2, pp. 36-41.

玉村文郎（1989）「日本語の音象徴語の特徴とその教育」『日本語教育』68, pp. 1-12.

田守育啓・ローレンス・スコウラップ（2001）『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版.

山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版.

徐一平・呉川・施建军・譙燕（2010）「日語拟声拟态词研究」『日本語の擬音語・擬態語に関する研究』pp. 1-72, 學苑出版社.

Iwasaki, N., Vinson, D.P., Vigliocco, G. 2007. What do English speakers know about gera-gera and yota-yota? *Japanese-Language Education around the Globe*, 17, 53-78.

Kakehi, H. 1983. Onomatopoeic Expressions in Japanese and English. *Proceedings of the XIXth International Congress of Linguists*, 913-918.

Toratani, K. 2007. An RGG analysis of manner adverbial mimetics. *Language and Linguistics*, 8, 311-342.

読解問題の参考文献

財団法人日本国際教育支援協会・独立行政法人国際交流基金（2008）『日本語能力試験1・2級試験問題と正解』凡人社.

四者択一問題の選択肢で使用した動詞											
音象徴語	正解		不正解1		不正解2		不正解3				
	動詞	選択者数 割合	動詞	選択者数 割合	動詞	選択者数 割合	動詞	選択者数 割合			
クラスターI	ちよきよき(単)	切る 59 67.82%	遊ぶ 14 16.09%	買う 5 5.75%	乗る 9 10.34%						
	めそめそ(単)	泣く 53 60.92%	晴れる 10 11.49%	忘れる 12 13.79%	疲れる 12 13.79%						
	ゆらゆら(単)	揺れる 60 68.97%	遅れる 4 4.60%	急ぐ 13 14.94%	安心する 10 11.49%						
	だらだら(多)	流れる 56 64.37%	つまづく 12 13.79%	理解する 5 5.75%	工夫する 14 16.09%						
	ことごと(多)	煮る 62 71.26%	編む 10 11.49%	歓迎する 8 9.20%	注文する 7 8.05%						
	きいきい(多)	鳴る 57 65.52%	入学する 3 3.45%	植える 20 22.99%	払う 7 8.05%						
	はたはた(多)	走る 60 68.97%	曲がる 5 5.75%	困る 22 25.29%	知る 0 0.00%						
	しくしく(多)	泣く 58 66.67%	開ける 14 16.09%	覚える 6 6.90%	勉強する 9 10.34%						
	げらげら(単)	笑う 75 86.21%	予約する 0 0.00%	踊る 10 11.49%	止める 2 2.30%						
	ほうほう(単)	燃える 76 87.36%	気づく 2 2.30%	願う 4 4.60%	努力する 5 5.75%						
クラスターII	ばたばた(単)	落ちる 72 82.76%	出席する 6 6.90%	楽しむ 8 9.20%	見つける 1 1.15%						
	ずきずき(単)	痛む 67 77.01%	こぼれる 7 8.05%	整理する 10 11.49%	発表する 3 3.45%						
	びよんびよん(単)	跳ぶ 71 81.61%	掃除する 3 3.45%	磨く 9 10.34%	答える 4 4.60%						
	きらきら(単)	光る 82 94.25%	沸く 5 5.75%	増える 0 0.00%	運転する 0 0.00%						
	ころころ(多)	転がる 69 79.31%	なでる 5 5.75%	発見する 3 3.45%	かわいがる 10 11.49%						
	じろじろ(単)	見る 26 29.89%	会う 3 3.45%	質問する 36 41.38%	行く 22 25.29%						
	すやすや(単)	寝る 30 34.48%	帰る 3 3.45%	話す 42 48.28%	入れる 12 13.79%						
	ぐうぐう(多)	寝る 24 27.59%	歌う 14 16.09%	教える 4 4.60%	洗濯する 45 51.72%						
	かんかん(多)	鳴る 24 27.59%	勝つ 24 27.59%	考える 25 28.74%	約束する 14 16.09%						
	ちよろちよろ(多)	流れる 25 28.74%	感謝する 9 10.34%	悩む 27 31.03%	診察する 26 29.89%						
クラスターIV	じゃあじゃあ(単)	流す 36 41.38%	飛ばす 27 31.03%	割る 20 22.99%	節約する 4 4.60%						
	ごくごく(単)	飲む 46 52.87%	休む 7 8.05%	食べる 17 19.54%	作る 17 19.54%						
	そよそよ(単)	吹く 39 44.83%	旅行する 6 6.90%	洗う 37 42.53%	着る 5 5.75%						
	しとしと(単)	降る 48 55.17%	借りる 2 2.30%	練習する 17 19.54%	閉める 20 22.99%						
	すらすら(多)	読む 36 41.38%	消す 32 36.78%	売る 6 6.90%	散歩する 13 14.94%						
	がんがん(多)	言う 40 45.98%	住む 4 4.60%	曇る 33 37.93%	座る 10 11.49%						
	ぶんぶん(多)	怒る 51 58.62%	計画する 4 4.60%	負ける 5 5.75%	太る 27 31.03%						
	どんどん(多)	たたたく 45 51.72%	悲しむ 7 8.05%	微笑む 8 9.20%	感心する 27 31.03%						
	ぱりぱり(多)	働く 45 51.72%	終わる 15 17.24%	待つ 13 14.94%	立つ 14 16.09%						
	ぐらぐら(多)	煮る 44 50.57%	記憶する 11 12.64%	引っ張る 22 25.29%	募集する 10 11.49%						

注1: 「割合」は各選択肢を選択した人数の割合を示す。  
 注2: (単)は単義の音象徴語、(多)は多義の音象徴語を表す。

付記 音象徴語の四者択一問題で使用した4つの動詞の選択者数と割合 (N=87)



## Understanding of sound-symbolic words by native Chinese speakers learning Japanese

Kaori IIDA (Nagoya University)

Katsuo TAMAOKA (Nagoya University)

Souken HATSU (Nagoya University)

### Abstract

The present study investigated the relationship between three levels of Japanese reading proficiency and the understanding of Japanese sound-symbolic words by native Chinese speakers learning Japanese. Those with higher level of Japanese reading proficiency had high correct rates of Japanese sound-symbolic words. However some of the Japanese sound-symbolic words were difficult to be understood among the Chinese participants and vice versa. The easy understood Japanese sound-symbolic words were mostly monosemic. There were some Chinese sound-symbolic words which had similar meanings with the Japanese sound-symbolic words. On the other hand, the clusters of low correct rates indicated that the Chinese learners of Japanese had difficulty to understand the meanings of the Japanese sound-symbolic words which described the way of crying, sleeping, flowing, seeing, and clanging.

Keywords: Japanese sound-symbolic words, Japanese reading proficiency, native Chinese speakers learning Japanese, cluster analysis